

---

# クトゥルー奇譚? - スフィンクスの下 (改) ー

秋月乱丸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クトウル―奇譚？ - スフィックスの下（改） -

### 【Nコード】

N6648T

### 【作者名】

秋月乱丸

### 【あらすじ】

新婚旅行でエジプトを訪れた二人はスフィックスの前で怪しい男と出会う。そして誘われるままにスフィックスの地下へと入って行く事になる。その先に何かがあるのか、まだ知る術は無かった。

## 砂漠の国で（前書き）

後半を投稿した際にダブってしまい、ダブリ分を削除したつもりが前半もろとも消えてしまいました（泣

仕方ないので加筆・訂正して再投稿です。

前回のを御覧になっている方はどう変わっているのかを探すと言うマニアックな楽しみ方も可能です（W

そんな方がおられるのかどうかは不明ですが。

宜しければご意見・ご感想をお寄せ下さい。

## 砂漠の国で

暑い。とにかく暑い。当然だ。ココはエジプト。夏に入った今は当然の様に連日30 後半だ。湿度はそれほどでも無い様な気がするが、半袖よりも長袖で肌を隠した方がいいと思える程の、本当に焼けつく程の日差し。そんな中で、巨大なピラミッドとスフィンクスが並んでいる。

抜けるような青い空と眩しい太陽の下で、大勢の観光客がクフ王のピラミッドに登って行くのが見える。その中から僕を呼ぶ声が聞こえた。

「明君ー！早く来なさいよー！」

張りのある元気な声。昨日から「山本美沙」になった僕の妻。やや小柄だが学生時代から続けているテニスのおかげだろう、引き締まった体つきだ。ソバージュのかかった髪は少し長めで良く似合っている。タレ目じゃあるが、ソレが優しい印象を与えていて僕の好みだ。彼女の声にに応じて僕もピラミッド登りの列に加わる。斜面中程だろうか、かつてアラブの太守アル・マムーンが爆破した（無茶しやがる）個所が入り口だ。やや窪んだ辺りにゴミが吹き溜まっているのが見える。世の中善人ばかりじゃ無いと言う証拠だ。上に正式な入り口があるが、観光客は盗掘用の穴から入る事になっている。いい気はしないが仕方ない。

この新婚旅行は美沙が計画した。古代史が好きな彼女は「生きていく間に一度でいいから行きたい場所」としてエジプトを選んだのだ。僕も歴史ミステリーが好きな方だし、何よりも彼女が喜んでくれるなら・・・と思つてOKしたのだが、正直この暑さはしんどい。

屋外スポーツであるテニスをやっている美沙はまだしも、僕は屋内競技である剣道をずっとやっているのだ。直射日光を浴びる頻度は・・・正直低い。僕自身も意識した事は無かったが意外な弱点だ。

ピラミッド内部へ入れば多少は暑さと、何よりも日差しを凌げるだろうと思っていたのだけど・・・甘かった。内部へ入った途端、湿った空気に全身を舐められたのだ。

「この湿気は中に入った人の汗らしいわよ？」

「うえっ、マジかよ・・・。」

剣道家の僕は人よりも汗には慣れている。なにしろ汗の染み込んだ面を被って稽古&試合をするワケだし。そんな僕でも見ず知らずの他人の汗は・・・やはりキツイ。仕方ない、コレこそが「ファラオの呪い」として諦めよう。

いや、むしろ目の前に行く美沙の汗と思えば・・・そんな事を考えていると美沙が急に屈み形のいいヒップラインが目の前に突き出された。「それ」を見ながら進んでいるとガッン！と天井に頭をぶつけてしまった。急に天井が低くなっているのだ。だからこそ美沙が屈んだのだが、どうも「目の前」に気を取られすぎたようだ。

「痛つてえ〜。」

「ちゃんと前を見なさいよ、前を。」

「いや見てたよ。目の前を。目の前過ぎたってだけで。」

「何ワケの分かんない事言ってるのよ。行くわよ。」  
頭を押さえていた手を見ると少し出血していた。天井にも血が付いている。こんな所に自分の血を残していくのは気持ち悪いので、持っていたハンカチで綺麗にふき取っておこう。

僕よりもピラミッドの方が優先の彼女はさっさと進んでいくので追いかける必要はない。

順次「王の間」から何から見て回り、南側の特別博物館の「太陽の船」も見物する。そしてスフィンクスを見ねばと移動。正直僕はしんどいが美沙はまだまだ元気一杯だ。さすが意気込みが違う。道すがら美沙がエジプト神話を語ってくれたのだが、中には神様が出て来ない話もあり、そんなの神話に入れていいのか？と疑問も沸いたがまあいい。

そしてスフィンクスに到着し、前から後ろから眺める。やはり何と

も言えない雰囲気がある。最古のピラミッドであるクフ王の物よりも古いそうだが、一体何の為に作られたのだろう？当然の疑問が沸いて来た。と言うよりもピラミッドそのものも結局墓では無いらしいし。歴史が古すぎるのも困りものだ。

「ねえ明君。エドガー・ケイシーって人知ってる？」

「聞いた事がある様な気はするけど。」

「予言者だか超能力者だからしいんだけどね、その人がこのスフィンクスの下に地下室か何かがあつて、そこにアトランティスの記録みたいな物があるって言ってるんだって。」

「それはそれは……。まずはアトランティスの方を証明しないとけない話だよな。」

「アハハハ！！ そりゃそうよね。」

そりゃピラミッドからスフィンクスから謎だらけじゃあるにしても、飛躍が過ぎると言う物だ。確か日本の大学が調査した時に地下空洞か何かを見つけたと言うニュースを見た気がするが、いずれハッキリする事だ。オカルト雑誌ならどんな話でも作るんだらうけど。

そんな事を話しながらスフィンクスの周りを巡っていると、妙な男がこつちを見ているのに気が付いた。暗緑色の僧衣を纏った男だ。フードを目深に被っているので顔は見えないが、こちらをじつと見ているのは分かる。いい気はしないが新婚旅行でトラブルを起こすのも御免だ。無視して通り過ぎようとした時、その男が話しかけて来た。

「旅のお方。スフィンクスの地下室に興味がおありですか……。」

いかにも怪しい。係わつたらロクな事にならないと直感が警報を鳴らす。

「いや別に。さあ向こうでラクダに……。」

「じゃあ本当にあるんですか!？」

イカン。美沙が食いついてしまった。彼女のお人好しも今回はマイナスに働いてしまった。人を疑わない性格は美点じゃあるが、世の中善人ばかりじゃ無いのだ。

「御座いますとも。お望みならばご案内致しますが……。」

妙にゆつたりとした喋り方。低い声。この男が喋ると周りが薄暗くなる気がする。時間の流れも遅くなる様な錯覚さえしてくる。詐欺師にピッタリな特性なんじゃないか？

「お願いします！」

美沙が即答する。おいおい。

「いや待て、アンタどう見ても観光案内人じゃないよな？そんな簡単に信用できないな。何が目的なんだ？」

当然の疑問をぶつけた。美沙は心配顔だが、用心に越した事は無い。

「私は然るべき時に然るべき方を案内する様命じられておりましてな……。それを忠実に果たすだけで御座います……。」

「然るべき時っていつだよ？然るべき方ってのは？」

「時は新月の夜。真夜中。丁度今夜で御座いますな。そして私を見つければ出来る方。それが条件で御座います……。」

「抽象的過ぎるな。それで信用しろと？」

「左様に御座います……。古代の真実を知ろうとお思いならば、今夜ここにお越し下さいまし。ご案内致します故……。」

「待ちぼうけになると思うよ。砂漠の夜は冷えるんだらう？無理はしない方がいい。」

会話を打ち切ってホテルへと美沙を引つ張って行った。彼女はまだ心残りの様子だったが構っていられない。これ以上は係わるなど頭の中の警報が最大音量で鳴り響いていたのだ。空を見上げるといつの間にか夕暮れが近づいていた。

ホテルへ戻って一休みした後レストランで夕食をとる。エジプトの夕食は夜9時ぐらいが普通らしいが、僕達はそうもいかない。本来なら楽しいハズの新婚旅行での夕食だが、二人とも何となく無口になつていた。原因はハッキリしている。あの男だ。二人とも妙にあの話が引つ掛かっているのだ。全く口クでも無い奴に引つ掛かつてしまったものだ。チクシヨウ。食後のワインを飲みながら美沙が思いつめた表情で言ってきた。

「ねえ明君。私・・・行つてみようと思うの。スフィックスに。あの男の言うように。」

「ちよつと待てよ。幾らなんでも止めておこうよ。怪し過ぎるって。」

「でもさ、丸っきりの嘘だったらあんな突拍子も無い話なんてしないわよ。それに気になる点があるのよ。」

「何だい、ソレは。」

「あの男・・・何語で喋つてた？ 私達は何語で返してた？」

「何語つて・・・アレ？」

思ひ出せなかつた。エジプトの公用語はアラビア語だが、観光地はご多分に漏れず英語は通じる。だがあの男は何語だつた？僕達はアラビア語はサツパリ分らないから会話自体成立するハズが無い。英語なら母国語じゃ無いんだから印象に残るハズだ。なのにサツパリ思ひ出せない。いや、僕はある時「日本語」で返していなかつたか？英語が決して得意ではない僕があんな台詞を咄嗟に英語で言えるのか？

「確かに・・・おかしいな。」

「でしょ？ このままじゃ気持ち悪いわ。」

「でも危険過ぎるよ。ここは日本じゃないんだ。何があるか分からないよ。」

「大丈夫よ。剣道有段者の明君がいれば。」

「ここには竹刀も木刀も無いよ。それに相手が飛び道具を持っていたらお手上げだ。」

何年か前にカイロで観光バスが爆破されたテロ事件を思い出しながら何度も説得を試みた。だが彼女は頑として聞き入れはしなかった。仕方ない。

「分かった。けど、とにかく少しでも危険を感じたらすぐに逃げる。いいね？」

「分かった。頼りにしてます旦那さま」

取りあえずあの男以外に誰かが来たら、すぐに逃げる事を内心決めておいた。美沙の安全は僕が保証しなければならない。

食後から夜が更けるまでの間は「大人の時間」を過ごし、PM11:00を回った頃に動き易い服装に着替え、LEDライトを手にスフィックスに向かって出かけた。エジプトは皆夜更かしだと聞いている。店は夜中の2時3時まで平気でやっていて、夜の10時に待ち合わせなどザラだそうだ・・・が、外に出て驚いた。真つ暗だ。人っ子一人居やしない。どうした事だ？事前に調べた情報が違っていたのだろうか？

立ち尽くしているワケにもいかないので、LEDライトの光を頼りに歩き出す。真つ暗闇のせいだろうか、昼間よりも道のりが遠く感じる。とにかく周囲を警戒しながらLEDライトの光はいいカモにされかねないー足早に進む。幸い何事も無くスフィックスに辿り着いた。

あの男はどこだろう？周囲を見回して探そうとしたその時。

「よっこそお越し下さいました・・・。」

「うおー!!」

いきなりあの男の声が僕の左肩口―右手にLEDライト、左手に美沙の右手を握っているから僕と美沙の間―から聞こえたのだ。驚いて後ずさってしまった。美沙に至っては声も出ない有様だ。しかし信じられない。長年武道をやって来た僕は人の気配に人一倍敏感なはずだ。しかも周囲を警戒していたというのに、こんなに近づかれるまで全く気付かないとは。

「あ、アンター一体いつの間にか？」

「私は先刻から此処におりましたよ。さあご案内致しましょう・・・」

相変わらずの口調だ。こつちの警戒心が空回りしている様な気になって来る。まあいい、周囲に人影も見当たらないし、この男だけなら何とでもなりそうだ。飛び道具さえ無ければ。

男がスフィックスの右前脚の前に立ち、右手で軽くノックするとうした事だろう。いきなりスフィックスの右前脚の側面にポツカリと黒い穴が現れた。ざっと縦1m横1mぐらいの正方形だ。

「何かのマジックかしら・・・」

「そりゃそうだろう・・・」

「さあ参りましょう。中は階段になっておりますのでお気を付け下さいます・・・」

男が先導する様に先に入って行く。こんなトリックに騙されてたまるものか。腹を括って僕達も続いた。

続く。

## 漆黒の地下室（前書き）

やっと後篇UPです。

お待たせ（誰か待ってくれてるのか？）しました。

## 漆黒の地下室

中に入ると意外に広い事に驚く。幅は2m近いだろうか。美沙と手を繋いで1用心しておかなければ1横並びでいても十分な余裕がある。高さも同程度だろうか、身長175cmの僕でも問題無い。

入り口から1mぐらいの所から下り階段になっていた。男に付いて行きながら周囲を観察する。階段・壁・天井の全てが黒一色だった。まるで黒曜石を磨きぬいた様に艶やかな表面。手で触れると、冷たくしつとりとした感触が伝わって来る。そしてよく見ると何mも、いや軽く20mは続く壁や天井に継ぎ目が全く無い事に気付いた。一体どれだけ巨大な石を加工したのだろうか？古代の絶対権力者とは、こんな無茶苦茶な事を実現させる程の力を持つていたという事なのだろうか。それとも継ぎ目が分からないような加工技術でもあったのだろうか。そう思ってLEDライトを壁に近付けた時だ。こんなピカピカに磨かれ、艶やかな表面にライトの光が全く反射してないと言う事実が気が付いた。こんなに艶のある石に1いや例えプラスチックでもだ1ライトの光を向けて反射しないはずが無い。どうなっているんだ？まるで星の光さえ届かない宇宙の果てを思わせる底なしの暗闇の様な黒。

思い切ってライトを消してみた。無論美沙にそうすると伝えてからだ。そして・・・全く何も変わらない事に愕然とした。何も変わらないのだ。普通に見えているのだ。照明など何処にも無いのに。入り口からも光など入って来ていない。入り口は開いたままだが、新月だし街の明かりもずっと遠くて問題にならないレベルだ。

一体どういう事なのだろうか？頭が混乱しそうだ。美沙も不安を隠せない様子だが、それでも「行きましよう。」と僕の目を見ながら言

う。男である僕がここで逃げるワケにはいかない。彼女の手を強く握り階段を下って行く。確かに不思議な事が続いているが、「危険」なワケでは無いのも事実だ。ここはまだ進む手だろう。

前を―つまり下方向を―見ると僧衣の男はそれほど離れてはいなかった。僕達を待つてくれていたのだろう。意外に相手に対して気を使うタイプなのかも知れない。そう思うと少しだけ気が楽になり、無難な質問を投げかけてみた。

「ああ・・・スマナイが・・・一つ聞きたいんだ。この階段はどのぐらいあるんだ？」

「この階段で御座いますか・・・なに、ほんの15段で。」

「はあ？いやちょっと待つてくれ。幾らなんでもソレは冗談が過ぎるだろう？」

「いえ、本当に『階段自体』は15段です。ただ・・・。」

「ただ何だよ？」

さすがに僕も腹が立っていたせいか、武道家特有の下腹に力を込めた気迫のこもった声を出していた。コレで怒鳴り上げるとヤンキー達も大人しくなる。ただ粗暴なだけの奴らと、心身ともに鍛えた者とは格が違うのだ。だがこの僧衣の男は相変わらず淡々とした声で返して来た。

「ただこの階段は『果てしなき15段』と名付けられておりまして・・・。御客人がこの先に相応しい精神状態になるまで『階段を下りている記憶』を繰り返す様に出来ております・・・。」

「記憶を繰り返す？どういう事だ？」

「論より証拠。それ、御主人の腕時計を御覧下され・・・。」

言われるがままに左腕のGナント力を見た。一昨年のクリスマスに美沙がプレゼントしてくれた物だ。それ以来肌身離さず身に付けている。僕にとつては縁起物と言つてもイイ物だが、今日だけは恐怖を「いや、驚愕か」をもたらしした。

何なんだこの日付は。この時刻は。いや覚えているが何故？これはこの時計を貰つて身に付けたその時の・・・。

「お分かり頂けましたかな？。今お二人はその時計に関する最も強い記憶を御覧になっておられるのですよ・・・。ココに入ってからその時計を御覧になっておられれば、その時の記憶を御覧になっておられたでしょうな・・・。事によるとお二人が御覧になっておられる時刻はそれぞれ違うかも知れません・・・。」

その言葉を検証する気力は僕達には無かった。ただ顔を見合わせて互いの感情を確かめ合い、男に続いて階段を下りて行くだけだった。美沙の手を握つた左手だけが僕の心を支えているのを実感する。もしも一人だつたらこの原初的な恐怖「何も頼る物の無い絶対の孤独から来る神話的な恐怖」に耐えられる自信は無い。

その後どれだけ階段を下りたのだろう。もう時間も何も考えなくなつていた頃、ようやく壁全体を占有する青銅の扉に行き着いた。緑青をふき、見た事も無い複雑な模様で縁取られた重厚な扉だ。その前に僧衣の男が立ち、僕達に告げる。

「心の準備は宜しいですか・・・？ この扉を潜つたその時、お二人の運命は決まってしまう事でしょう・・・。」

「ココまで来てソレは無いわ。開けて頂戴。」

こう言う時女は強い。引き返そうかという思いが胸をよぎつた自分

を恥じながら下腹に力を込め、覚悟を決めた。何があるとも美沙だけは無事に地上へ帰す。それだけを心に刻み、男が無言で開いた扉を潜った。

周囲を見渡すと思っていたよりも遙かに広い事に驚いた。25mプールを二つ繋げたぐらいだろうか。高さは5mぐらいか。その部屋の真ん中に大きな水晶のクラスタがあった。中央の結晶は高さ3mはあるうかと言う巨大さだ。周りを囲む結晶も高さ1mぐらいか。そしてコレも黒一色だった。全くの直感だが相変わらず漆黒の周囲を映していると言うワケではなさそうだ。

だが・・・コレだけなのか？確かに意外だし驚きの物ではあるが、正直な話、途中の階段の方がよっぽど・・・。

「なあ、これだけなのか？他には何も無いのか？」

「これだけでして。そして・・・これが全てを教えてくださいょう・・・。」

「どづいう事だ？」

「おお、我が主ネフレンカよ・・・暗黒のファラオよ・・・この無能者は御身から授かった命を遂に果たしましたぞ・・・。今こそ我に永久の安らぎを・・・。ネフレンカ、真理の糸を織り上げん・・・。」

男の肩を掴もうとしたその瞬間。暗緑色の僧衣がパサッと床に落ち・・・空中にそれがあべきと思しき辺りに灰色の心臓が数瞬あった。人体構造で御馴染の形だ、間違うハズが無い。ソレが床に落ち、乾いた音を立てて砕け散った。

僕達は夢でも見ていたのだろうか？いや、周囲を見れば、そして床で粉々になった心臓のなれの果てを見れば分かる。コレは紛れもな

い、その上最悪の現実だ。とは言え、いつまでもココに突っ立っているワケにもいかない。幸い扉は開いたままだし、さっさと帰ろうーそう言おうとした時だ。水晶のクラスターが青白い燐光を放ち、それが伸びて来て僕達に触れた。

そして僕達は見た。イメージが直接頭に入り込んで来たのだ。

遙かな宇宙空間。そこで繰り広げられる異形の怪物達と人間に似た神々のいつ果てるとも知れぬ、言葉では言い表せない人知を超えた戦い。幾つもの恒星が壊れ、星座がその形を変え、遂には怪物達が敗れる。異形の<旧支配者>と人間に似た<旧神>と呼ばれる存在達。ある<旧支配者>は遙か彼方の星に幽閉され、地球の太平洋に沈む海底神殿ルルイエにクトウルーは幽閉される。そしてナイアーラトテップ、ヨグ・ソトース、ツァトゥグア、ハスター、イタカ・・・数知れぬ邪神群である<旧支配者>達。それを崇める忌まわしき者達。そこまで理解した時、僕の理性―武道で鍛えた精神力の賜物だろうか―がフルパワーで自意識を蹴飛ばして我に返った。

「美沙、ココから逃げるぞ！」

この際だ、問答無用で美沙を左脇に抱えて力づくで逃げ出す。ココから先はハッキリとは覚えていない。無我夢中だったのだ。これ程までに必死になった事は無いだろう。これまでも、そしてこれからもきつと。

地上に出て来てからの事は覚えている。何しろ美沙が・・・。

街の光を遠目に見た途端に力が抜けた。地面に倒れこみ砂が口に入るが、そんな事は気にしていられない。後ろを振り返り、入り口が消え去っている事に安堵する。仕組みは分からないがどうでもいい。

「美沙、助かったぞ！」

彼女の顔を覗き込んだ瞬間、血が凍りついた気がした。優しさを湛えた眼差しは何の意思も感じさせず、力無く空を見つめているばかりだ。口元はだらしなく半開きになり唾液が顎まで伝っている。

生きた心地がせず、半狂乱になつて美沙を抱えてホテルに走る。フロントを叩き起こし―時間は見ていない。そんな余裕があるものか―病院に連絡させ美沙を運び込む。診察の結果は原因不明。当然だろう、一緒にいた僕も説明できない。あくまで推測だが、あの水晶が美沙の意識―或いは魂か何か―を吸い取つてしまつたのではないか。あの僧衣の男はきつと、奴が言つていた主「ネフレン」カ」とか言つ奴に生贄の魂か何かを捧げる役だつたのだろう。他に考え様が無い。

いや、そんな事はどうでもいい。何故僕は美沙を止めなかつたのだらう？何故途中ででもいい、引き返さなかつたのだらう？絶対に彼女だけは守ると誓つたのに。美沙に付添いながら後悔と自己嫌悪を果てしなく繰り返した。

そしてあの夜から二日目の朝。

突然美沙が意識を取り戻したのだ。まだ弱弱い状態だが、ハツキリと僕の名を呼び、自分の名前も両親の名前も言えた。これ程神に感謝した事は無い。嬉しい時にも涙が出る事を初めて知つた瞬間でもあつた。

今僕は帰国の準備をしている。美沙が日本に帰る事を望んでいるのだ。荷物をまとめながら、僕自身もさつさとこの砂漠とオサラバしたいと切に願う。

美沙の様子が少し変わっているのも仕方ない。あんな事があつたのだから当然だ。だからと言つて彼女への愛情がいささかも揺らぐものではない。むしろ以前よりも絆が強まつたと言えるだろう。彼女が喋ると少し薄暗い感じがするのも、時間の流れが遅くなつたように感じるのも、きつと気のせいだ……。

## 漆黒の地下室（後書き）

いかがでしょうか？

正直「また後で書き直さないとなあ」なんて思っています。休日出勤の上に酒飲みながら書いてますし（ヲイ

設定としては美沙ちゃんもネフレンカ（カ）の呪いに取り込まれてしまったという話です。その後は知りません（W  
後は野となれ山となれで。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6648t/>

---

クトゥルー奇譚? - スフィンクスの下(改) -

2011年10月9日01時01分発行